

研究ノート

師僧葬儀において足袋をはかない理由

藤崎善隆

日蓮宗辞典「清浄衣」の項には次のようにある。

主に加行僧、遷化僧及び遺弟の衣帯として用いられている法衣と袈裟のこと。生麻（きあさ）でつくり、法衣の形は、直綴、袈裟は、五条袈裟と七条袈裟の二種類ある。五条は、専ら、加行中の僧が用い、七条は、僧侶の葬儀の際に用いられている。しかし、清浄衣は単に僧侶の喪服ということではなく、仏制にかなった如法衣であるという解釈で、日蓮聖人六五〇遠忌の宗門代表者の衣帯として用いられたり、施餓鬼法会の導師の衣帯として用いられている例もある。

そして、七条には、掛絡紐を環に結ぶものと、鉤を環につなぐものがあるが、いずれを用いてもよい。袴及び足袋は着けないのが通例である。なお、無染の白色を清浄な色とする考え方は、本来は神道のものであるが、僧侶が、国家鎮護のための祭祀をつとめるようになった平安時代中期頃（一〇世紀半ば）からは法服の色としても用いられるようになったものである。

この記述の通り、僧侶の葬儀において遺弟が清浄衣を着用するときは袴及び足袋をつけない。遺弟であるから足袋を履かないのか、清浄衣を着けるから足袋を履かないのかといえば、後者の理由であるように思われるが、一方で一

般の葬儀においても遺族（喪主とその妻）が足袋を履かない習慣が見られるとのことである。

インターネット上ではその理由を尋ねる質問が出されており、回答として出処が明確なものはないが、①「死者に寄り添い送り届けるために、黄泉の国に対する礼儀として、故人はもとより付き添いの者も一切の装飾品を身につけてはいけない、という考え方がある」というような説明がなされている。更に補足として、「（死者が）生まれた時のままの純粹無垢な姿で黄泉の国に赴くという意味で、裸になるわけにはいかず、白無垢ということでは白装束、裸足ということになり、喪主もそれに習う」との説明がなされている。ほかに②「遺族というよりは埋葬（土葬）時に棺を担ぐ者が、（汚さぬように）足袋を履かなかつたところからそういう習慣だけが残った」。また③として「【たびたび】葬儀が起きないようにという単なる語呂合わせで迷信である」という説明もある。何れにしても信頼できる文献的な裏付けはない。

そこで、この足袋を履かない＝裸足であるということにどのような意味があるのかと言うことを考えてみたい。

今井昌子氏は、『大御葬歌』試論（『同志社国文学』41号）において、『古事記』に描かれる倭建命の死に際し、后や御子たちが裸足で足を傷つけながら倭建命の靈魂としての八尋白智鳥（やひろしろちどり）を追いかけた（爾其后及御子等、於其小竹之荊杙、雖足躓破、忘其痛以哭追）。歌が『大御葬歌』に収録されていたことから、「悲しみを表現する」手段として裸足になる習慣が見られることを指摘している。また関連して、『礼記』喪大記に「凡主人之出也、徒跣（とせん）扱衽（そうじん）拊心」とあるように、古来喪主が弔問客を迎える時、素足になって悲しみを表現する習わしがあったらしいことを指摘している。徒跣（かちはだし・とせん）とは、履物を履かないつまり裸足ということである。

更に、たとえばお百度参りが裸足で行われるように、「裸足になること」が神聖なるものを崇める姿勢を示す、という意味合いで考えられることもある。寺院などで脱帽が求められたりすると同じような考え方である。いずれに

しても、「習慣」「習わし」のようなもので、明確に規定するものではない。

一方で足袋について考えると、その起源は襪（しとうず）と呼ばれた貴族の「靴下」であるとか、獵師が履いた革製の「靴下」であると言われるが明確ではないようである（後者が直接の起源であろう）。

宮中に由来する襪については、『養老令』に礼服に錦襪、朝服に白襪を用いると定められているほかには、高德の老人以外その着装を許されていない。また夏冬の区別無く履いたもので、基本的に束帯の時の外は着用しなかったが、先に述べたように老人は直衣衣冠のときでも勅免を蒙って着用できた（石村貞吉『有職故実』）。

また足袋については、室町御所に仕えた伊勢貞頼の著した武家故実の書である『宗五大草紙』によると、足袋を用いることができるのは五〇歳以上の高齢者で、一〇月一日から二月二〇日の間とされており、それ以外の場合「足袋御免」の許可を得なければならなかったといい、それは尚武と素足を礼とする習慣によるものとしている（『日本史大事典』4巻）。

両者の着用については上記のような特別な意味合いが認められ、足袋そのものに装飾（贅沢）の意味があり、それを省くことで敬意を示し亡師に従うという意味合いを推測することができるといえまいか。

以上のようにまず、

1. 「足袋をはかない」＝「裸足になる」ということは、

神聖なものに対する敬意を示す行為であり、悲しみを表現する手段であり、

2. 一方、「足袋」というものの意味合いが

礼装や高德の者に許された装飾の意味合いを持つ特別なものである

ということとを兼ね併せて考えると

師の遷化に際し遺弟が足袋を履かずに裸足になることは、一切の装飾を省いて亡き師に寄り添い、神聖なるもの

として敬意を示し、その悲しみを身を以て表すものである
と推測することができる。